

いなる草

津村 明子

息子が4歳のときでしたから、1967年（昭和42）だったと思います。親子3人で高知と小豆島をまわる小旅行をしました。ちょうどNHKの放送教育（学校放送）の研究会が高知市で開催され、1泊2日の出張になったので、途中で落ち合うことにしました。高知市の旅館で、仕事が終わった私と、当時住んでいた京都から夫と息子が来ていっしょになるという段取りでした。

夕方に、はりまや橋で同僚たちと別れ、「もう着いているかな」と思いながら宿にむかいました。「こんばんは！」と玄関に入り、迎えてくれた係の人に名前を告げると、なぜかびっくりしたように奥に入り、おかみさんらしい人が一緒に出てきました。「まあ、まあ、お母さん、よう帰ってきてくれましたな。早よ、早よお部屋へ行ってあげてください。お待ちですよ」・・・と、なんだか様子がおかしいのです。

おかみさんが部屋まで案内してくれて、「ぼうや、お母さんですよ。よかったね。よかったね」というと、息子はキョトンとして「ママ！早かったね。」と家から持ってきたゲームに熱中しています。夫はなんだかバツの悪そうな顔をしています。「いったいどうしたん？何かあったん？」と私。

「あんなあ、女房に逃げられた夫がな、子連れで追いかけてきてるとわかれてんねん。えらい迷惑な話や。」「え！なんでやの。なんでそんなことになんの？」とおなかを抱えて大笑いしてしまいました。

その頃はまだ、30歳そこそこの男性が子どもと二人だけで投宿することなどなかったのでしょうね。それでこのような誤解がうまれたのでしょう。いくら事情を説明してもらえなれないと思い、居心地の悪い思いをしながら次の日は早々と出立しました。

この日からもう40年ちかくなるのに、最近の新聞では、育休中のお父さんが孤立している悩みや、お父さんが小学校のPTAに参加するとまわりはお母さんばかりで違和感があるとかの記事が目につきます。強靱な意志を持っている人だけでなく、誰もがジェンダー平等の子育てができる社会的環境や、働き方を造っていかねばとおもいます。

2006年夏号 VOL.9

つむら あきこ（いこ☆る代表）



いこる草

津村 明子

将来は、自分で自分の食い扶持を稼ぐのだと自覚したのは小学校5年生ごろだったと思います。両親は家どうしの見合い結婚で、それぞれ大卒と女学校卒でしたが、女の子は「いいところに嫁がせる」程度のことしか考えていなかったようです。ひとつ違いの弟がいましたが、母は特に弟の成績に関心を集中させていて、何とかできのいい子に育てようと必死になっているのを、私は冷ややかにながめていました。

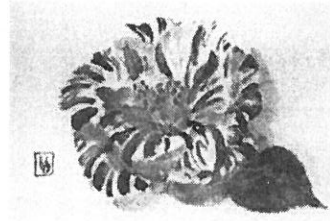
祖母は、私の父がおなかにいるときに夫を「日露戦争」でなくし、子供をつれて実家に帰り、成人するまで厄介になったのでした。当時は戦死を嘆くと非国民のそしりを受けたせいか、祖母から、悲しいとか、さびしいとかいう言葉をついぞ聞いたことがありませんでした。好きで結婚した相手でもなし、一緒に暮らした期間も短いのでそうなんかなあと感じていましたが、人間って何かにやりがいを持たないと生きていけないんだということを見ました。父はマザコンではありませんでしたが、祖母の父への期待、よりかかりはすさまじいものでした。二日にあげず神社、仏閣に参詣し、肉食を断って行いすましているのですが、それは戦死した夫への供養ではなく息子の健康、事業の成功をひたすら願ってのことだったのでした。

弟と私の、まわりのおとなからの扱われ方が全然違い、長男だからというだけで大事にされていましたので、ひとりで憂鬱になったり、ひがんだり、母に反抗したりし、「お嫁になんか行かへん。自分で働く。」というのがくちぐせでした。父はひとりっ子のせいか大の子供好きで、ことに女の子の私がめずらしく、なんでもゆうことをきいてくれましたので、まあバランスがとれていたのかなと思います。

戦中、戦後直後は、男性の仕事が女性と子供がぜんぶ肩代わりし、立派にこなしていました。女性の意気が上がっていたところに、新憲法の公布で日本の歴史上初めて男女が平等になり、参政権も獲得できたのでとてもうれいでした。11歳にしてやっと自由の身になれたのです。でも内心では、ちょっと「たなぼた」じゃないかなともおもいました。

新制中学校、新制高校、新制大学の間は男女平等を謳歌していました。しかし、社会への入り口に立ったとき、私が夢にまで見ていた自立への道は閉ざされていました。全然就職口がなかったのです。卒業を1年のばして、やっと職にありつくまでの不安と苦しみが、これまでの私の職業生活の支えとなったような気がします。

いこる草



津村 明子

上田育子さんが脳内出血で倒れたのは昨年10月12日の夜、地域での労働問題学習会で、報告を終わって自席に戻った直後だったそうです。運ばれた病院で手術が終わったのが朝の7時。命を取り留めたのがせめてものさいわいでした。暮れの12月6日、リハビリの専門病院に転院し療養を続けています。この間、全国からご遠方にも関わりませず多数の方々がお見舞いに来てくださりましてほんとにありがとうございます。

先日、病院の隣町で午前中にしごとがありまして、午後からお見舞いに行ってきました。車ですと、JRの駅を降りて10分ほどですが、バスは1時間に2本ほど。いいお天気だったので歩くことにしました。大阪府と和歌山県の堺に葛城山脈が横たわってしまっていて、広々とした畠の中に通っているバス道を山に向かって40分ほど歩いて病院につきました。

面会時間が始まる14時前に着き、しばらく待ってさっそく病室へ。「上田さん！津村です」と呼びかけたら、びっくりしたような顔をしたので、「わかるんやー」と感激。掛け布団を跳ね除けて横たわっていて、お風呂に入れてもらったのか顔も手足もびかびか、つるつるでした。

すぐ看護師さんが来て、検温、血圧測定がありました。最初手を握ったとき、ちょっと熱いなと思ったのですが、体温37度、血圧136でした。痰を取ってもらったあと、男性の先生のリハビリが始まりました。片側ずつ、手足の屈伸です。呼びかけどおり左手で、「グー、チョキ、パー」が不完全ながらできるので改めてびっくり。右半身はかたくてうまくいかないようすでした。強く屈伸運動をすると「痛い！」と左手で払いのけるようなしぐさもします。

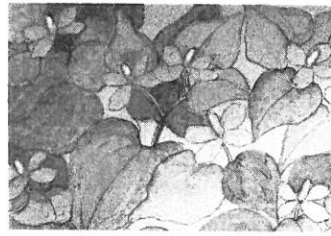
随分よくなってきてるのを実感しました。先生のおっしゃるには、「何でもわかっているのに、もう大声で呼びかけなくても普通におしゃべりしてください。」とのことでした。何でもわかっているのに、答えるすべがないなんて、上田さんはどんなに残念がってることでしょう。これからはベッドサイドで、いろんなことを話しかけるのがいいのかなと思いました。リハビリ運動は約40分かかりました。

いっぱい話しをして、OKだったら「パー」、NOだったら「グー」と意思表示がしてもらえるのもまもなくではないでしょうか。

つむら あきこ (いこ☆る代表)

2007. VOL 11

いなる草



津村 明子

今年、現憲法が施行されて60周年にあたります。1947年亥年生まれ、同じ亥年生まれ、私の12歳年下になります。太平洋戦争敗北後、2年たっていました。都会はほとんど空襲で丸焼になり家も食べ物も無く、大人も子供も飢えていました。そんな中で、新しい憲法は国民に生きる希望を与え、勇気づけてくれました。

それまでの学校制度は、小学校までが義務教育で、そのあとは男子は中学校、女子は女学校に進学できる事になっていましたので、6年生になって女学校の受験勉強をしていますと、突然6(小)・3(中)・3(高)制に変更になり、男女共学、中3まで義務教育になりました。受験はないし、女の子も男の子と一緒に同じ年限だけ学校にいけることになり、それまでは、女の子は女学校5年生でおわりで、すごく憤慨していましたので、もうすっかりうれしくなりました。

「どうして? どうしてこんなええ世の中になったん?。タナからボタモチや」と思ったものですが、戦後、アメリカを中心とする連合軍による改革はとてもスピーディなものでした。

- | | | |
|-------|--------|---|
| 1945年 | 8月15日 | 戦争終結の天皇による放送 |
| | 9月2日 | 降伏文書に調印 |
| | 9月6日 | 米大統領「降伏後の初期対日方針」を承認 |
| | 10月4日 | 連合軍最高司令官マッカーサー、日本政府に人権指令
(天皇に関する自由討議、政治犯釈放、思想警察全廃、
治安維持法撤廃) |
| | 10月11日 | 五大改革指令
(女性解放、労働組合の結成奨励、学校教育民主化、秘
密審問司法制度の撤廃、経済機構の民主化) |

この指令は、すべて新憲法にも盛りこまれ、日本は民主主義国となり国際平和主義、主権在民主主義をとり、戦争放棄をうたい、基本的人権を保障する憲法をつくりあげました。当時の文部省は、中学校1年用に「あたらしい憲法のはなし」を社会科の教科書として発行し、先生方は本当に熱心に生徒たち(私もその中のひとり)に教えました。

今、政府自民党安倍首相は、国際平和主義と戦争放棄をうたっている「憲法九条」を改変し自衛隊を戦争のできる軍隊に変えようと躍起になっています。そればかりかこのところ、「戦後レジーム(体制)からの脱却」と称して、教育のありかた、個人の生き方まで変えようとしています。現憲法はアメリカから押し付けられたものだから変えたいといいながら、一方では最大の同盟国として付き従うという矛盾した姿勢をとっています。

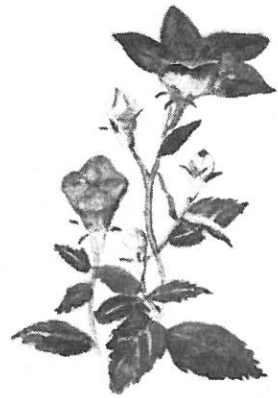
憲法の申し子である私は、この60年間日本と周辺諸国に平和をもたらせている「憲法九条」を同じ志の人々と共に守り抜きたいと思っています。先日の5月3日の「憲法記念日」には大阪でも主催者の予想をこえる大勢の人々があちこちの会場に集まりました。

つむら あきこ (いこ☆る代表)

2007.夏、VOL.12

いこる草

津村 明子



2年半ほど前のある日、飼い猫の長老マルちゃん（11歳、白猫、おす）が、黒か茶色か色目もはっきりしない子猫をつれてきて、自分の食事を一緒にたべさせていました。

「へー、猫の育児パパか」と観察していたのですが、その後も朝夕の食事時間には必ずマルの後ろに隠れるようになってきました。新しく来た猫の名前はみんな夫がつけるのですが、今度の「食客」は何にしようということで、こげ茶色なので「コゲちゃん」となりました。

困ったことには、私たちが廊下へ上げようとしたり、頭をなでようとする、とんで逃げ、どうしても触らせてくれません。野良ちゃんは必ず悪いビールズに感染しているので、健康診断に早く連れてくるようにお医者にも言われたのですがどうしてもつかまりません。魚の投網をかぶせてつかまえようということになり、アチコチ探すのですが手に入りません。

そうこうしているうちに、コゲちゃんは1人前になりひとりで食事にくるようになりました。猫たちの食事は4時と16時ですが、コゲちゃんだけは明るいうちは絶対現れず、いつも夜陰に乗じてやってきて、縁側のくつぬぎ石のうえで、私たちが気がつくまで辛抱強く待っています。

夕食を担当することが多い夫は、コゲちゃんを何とか手なずけようと必死になっていました。抱き上げようとしてひっかかれたり、お皿を廊下において上がってこさせたりしていましたがどうもうまくいきません。「全然、人間を信用せえへんなあ」と、受け入れてもらえないことを嘆いていました。

先日、いつもはお代わりをねだってにゃあにゃあ鳴き続けるのに半分ほど残しているの、「どっか、よそさんでおいしいものをもらたんかな」と話していたのですが、それから3日続けて現れませんでした。どこにいるのか全く分からない猫でしたので探しようがありません。

4日目の朝、雨戸を1枚開けると、かすかに異臭がします。あわてて床下を覗くと、コゲちゃんの短いシッポが見えました。いつも食事をするくつぬぎ石のすぐ奥です。「コゲちゃんが死んでるよ！」と大声を上げると、夫ははだしでとびだしてきました。バスタオルでくるんで「死んでから初めて抱かしてくれたなあ。」と言って泣きました。

この家で死んだ猫たちがいる庭のお墓に埋葬しました。「たった2年半のいのちやつたけど、これからはずっと一緒にいられるね。コゲちゃん！」

お医者へ報告したら「急死のようだから、たぶん『猫フィラリア』でしょう」とのことでした。

つむら あきこ（いこ☆る代表）

2007. 秋号 VOL.13

いこる草



津村 明子

1960年にNHK大阪放送局に就職して最初に担当したテレビ番組は「きょうの料理」でした。この番組は今でも健在で、長寿を誇っていますが、当時、テレビはまだモノクロで、せっかくの料理もおいしそうには見えませんでした。それよりも、ずっと拒否してきた「花嫁修業」をなんでNHKでしないかんのと不満タラタラでやっていました。後世、「和食の神様」といわれた土井 勝さんが講師でした。

今は「生協」の責任者で「食の安全・安心」が最高のモットーですが、戦中、戦後の飢餓状態からやっと抜け出し、おなかいっぱい食べられるようになったら、今度はあらゆる汚染で毒まみれの食品が横行するようになりました。それに最近の相次ぐ「偽装」事件！儲けのためなら何をしてもいいというメーカーは廃業に追い込むべきです。「生協」も卵や肉類の産地偽装に巻き込まれてきましたし、「ミートホープ事件」では人気商品の「生協のコロッケ」はミートホープ社のミンチでできていました。

このような食を取り巻く状況の中で、私自身も家族（といっても夫だけ）を巻きこんで、かなり食生活を変えてきました。BSE事件のあと、牛肉を食べるのをやめました。

便利で食欲をそそる「生協」や、デパ地下のおそうざいは一切買わない。今年からは試食のつもりで毎年買ってきた「生協」の「おせち」もやめることにしました。関西では正月料理とかお煮しめとっておせち料理とはいわないのですが、今は全国の人気商品です。お正月に保存のきく料理を作り置きし、家族全員がのんびり過ごすというのが主旨だったのですが、デパートもスーパーもコンビニも年中開いていて不自由しないのにヘンな流行ですね。

既製品の「おせち」を買わない理由。

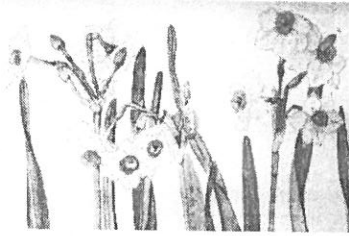
- * 「見た目」ばかりで値段が高すぎる。
- * 防腐剤漬け
- * 飾りつけが仰々しくて、食べられる部分が少ない
- * 味付けが私の口に合わない

というわけで、今年から「今日の料理」で鍛えたウデをいかして、また手作りのお煮しめにもどります。29日に黒豆の下準備からはじめます。

つむら あきこ (いこ☆る代表)

2007 冬 VOL.14

いこる草



津村 明子

関西圏の私鉄、市営地下鉄にも「女性専用車両」があります。朝のラッシュ時のみというのと、いつも混み合う路線は終日ということになっています。第一の目的は痴漢対策ですが、「男性差別」「乗っている女性のマナー悪さ」などの反対論が取沙汰されています。大阪では今のところ取りやめになった路線はありません。

私は大阪市営地下鉄・御堂筋線に乗ることが一番多く、この路線は大阪市の真ん中を南北に走るメインの路線で、終日「女性専用車両」があります。ラッシュ時に「女性専用車」に乗ると、正直言ってホッとします。

電車通学を始めたのは高校生になって京都市電が最初でしたが、それ以来ずっと痴漢との闘いに明け暮れてきました。特に込み合うときの体の接触、すいているときにわざわざ隣りに座りに来るオヤジ。引きずり出すことこそできていませんが、口げんかはしょっちゅうです、仕事をする前に、もうへとへとになってしまいます。

女性車両に乗ってくる男性には様々なタイプがあります。

ウッカリミス：すいているときに飛び込んでくる。なんだかヘンやな。あつ、女性車両や！どうしよう！とあわて、隣の車両へ行こうとするが扉がない。次の駅で脱兎のごとく飛び出していく。

便乗組：夫婦または恋人どうし、またはお友達。必ず女性がすわり男性が前に立っている。男性が座っていると周囲からどつと視線があつまるからか。

確信犯①：わざと乗ってきて、つり革にぶらさがりながらメールを打つ。しかし恰好だけで、視線はたえず周囲の女性をちらちらと見続ける。

確信犯②：女性の中にデンと座ってグーグー寝たふりをし、薄目をあけて前の女性を見る。老人も、若いのもいる。

確信犯③：ホームでどこからか視線を感じてその方を見ると、穴の開くほど見つめている男がいる。電車が来て座席に座ってフト見ると、その男が右隣りにいる。ついてこないように次の駅でドアが閉まる直前に脱出。

昨日も、近鉄（私鉄）の中で、高校生にセクハラ行為をして乗客たちにとりおさえられ、駅長室（3階）の窓から飛び降りて死亡した男性の記事がありました。労働相談でも職場のセクハラはあとをたちません。やはり、小さいときからの、男の子の育て方が一番大事だと思うんですけど。

つむら あきこ（いこ☆る代表）
2008、春号 vol.15

いなる草



津村 明子

5月6日、連休の最終日に「舞州(まいしま)アリーナ」で、5,000人規模の憲法集会、「9条世界会議・関西」を開催しました。「世界は9条をえらび始めた」というキャッチフレーズで、ノーベル平和賞受賞者など、日本の憲法9条を評価してくれている海外ゲストを招き、世界平和を語り合おうという主旨です。

実行委員会には、あらかじめ声をかけた団体以外でもどんどん参加してほしい、そして党派をこえ、9条改変に反対のグループ、個人はどなたでも参加OKとなっていました。

こんな呼びかけでウマクいくのか?とっていたら、なんと事務局長をやったという依頼が来ました。フーン、これは生協の200万組合員が当てにされているなとすぐ分かり、理事会にかけてみました。なんと各生協が乗り気になってしまい、下りられなくなっていました。

準備の会議が始まってみると、みんなやる気満々。会場までのアシの問題、会場内外のボランティアの募集、大量の昼食弁当の手配、グッズ販売や展示の募集と売り場の設営など私には経験のないことばかりでしたが、実行委員の中にそれぞれのプロがいてすんなり事が運んだのには驚きました。私にできることといえば、司会者、国内ゲストの出演交渉、舞台進行と舞台監督ぐらいなので、それを引き受けることにしました。

初めのうちは賛同金がなかなか集まらず、赤字が心配でしたが、1ヶ月前から急が増えだし、ボトルの「9条茶」、クリアファイル、エコバッグなどのオリジナルグッズも集会に持っていくとよく売れました。前売り切符も、何かと理由をつけて買ってくれないのが普通ですが、なんだか今回は違うのです。「舞州に行ってみよう」「ベアテさんの話がききたい(憲法に男女平等の条文をいれてくれた)」「米軍の大佐から平和運動家になったメアリーさんってどんな人?」等々。ロックバンドの「ソウルフラワーユニオン」もなかなかの人気でした。

そして当日!すごいことが起こりました。プログラムは「まあ6,000部作っとうるか」ということだったのですが、開場後あっという間になくなり、まだ長蛇の列。「桜島駅の臨時バス乗り場が大混雑!」「会場の座席が足りないよ!」「通路だけあけて、床にすわってもらって!」と大わらわ。結局8,000人が会場にあふれかえりました。

翌日からはメールの大洪水。「おつかれさま!いい集会だったよ!」と皆さん満足してくださって、ホッと肩の荷がおりました。

今年になって「9条を変えてはいけない。」「自衛隊を軍隊にするな」という意見が13年ぶりに改憲派を超えた(読売・朝日世論調査)ことや、自衛隊のイラク派兵に違憲判決が出るなど、何かが変わってきたという気配を感じます。日本女性の平均寿命は89歳までのびました。元気で憲法と共になんかがんばりたいと思います。

いこる草



津村 明子

「デパ地下」のパン売り場に、さまざまなパンがあふれんばかりに並んでいるのを見ると、目まいを起こすことが以前からよくあります。ぼんやりした意識の中で必ず見えてくるのは、戦争末期に売るのがなくなって、ほとんどのショウケースに黒い布がかけられているようすです。「おいしそうなパンがこんなにたくさん！これって夢よね」「でも、レジにいっぱい人が並んでる」。自問自答しているうちにふっと正気にかえって、今度は、いつまでも食料の豊かな平和な時代が続きますようにと祈りに近い不安な気持ちになるのです。

昭和16年(1941)12月8日に太平洋戦争が始まると、食料や日用品はすべて配給制になりました。お菓子や酒、たばこが店頭から消え、だんだん食料にまで及んできました。

当時の日本人の主食はおコメと麺類でしたが、配給のおコメに大豆やコウリヤン、豆かすなどが混じるようになり、そのまま炊くとまずくて食べられないので、混入物を丹念により分けるのが母や祖母のしごとでした。おコメは白米ではないので、一升瓶に入れ、竹の棒で搗いて白くしていました。道路ぎわや小さい空き地は野菜畑になりました。当時の国のスローガンは「ほしがりません！勝つまでは！」でした。

しかし、ほんとの飢餓が国民を襲うのは戦後になってからでした。国内には老人と女性と15歳以下の子供しか残っていませんでしたし、あらゆる生産の場が爆撃で破壊されつくしてしまっていたので、終戦となっても食料の増産など無理なことでした。法外なお金でわずかなおコメを買う、焼け残りの衣裳と物々交換をするタケノコ生活、駅前のでらで雑炊をすすめるなどが日常でした。

私は、昭和20年(1945)6月15日、国民学校5年生で空爆で焼け出され、あちこちの親戚で厄介になりながら8月の末に母の実家(和歌山県橋本市)の蔵に寄寓することになりました。田舎でしたが食糧難は都会並みで、ジャガイモ、サツマイモを蒸したもの、顔がうつるほどのおかゆ、味噌汁に小麦粉の団子を入れたすいとんなどが常食でした。翌年、やっと京都市内に落ち着いたのですが、戦災を受けなかったこの地でも食料の不足は同じでした。おコメの代わりに、やし粉、干しプラム、進駐軍の携帯食、小麦粉などの配給が続き、小学校の給食は、海外からの援助でまかなわれていました。脱脂粉乳、鮭缶のスープ、パンという献立がずっと続きました。

私の戦争体験は、忠実な軍国少女だったので、空爆で着たきり雀になっても今度は本土決戦だと強がっていましたし、敵地の兵隊さんは「泥水をすすって、草を食べ、がんばっている」と先生に言われて納得するほどの単純なものでした。命永らえて思うことは、二度と再び国家の誤ったプロパガンダに乗らない決意を持つことです。

つむら あきこ (いこ☆る代表)

2008, 秋月号 vol.17

いなる草



津村 明子

まさか70歳代まで生きるとは思いませんでした。小学校（国民学校）へ上がってから1年生の頃は、風邪、扁桃腺がはれるなどでしょっちゅう休んでいる子でした。1年生の12月8日に、「太平洋戦争」が真珠湾攻撃というサプライズで始まり、急に「国を守る強い子を」ということで、学習よりも鍛錬（たんれん）が重視されるようになりました。

毎日、午前中に全校生が運動場に整列して、上半身はだかになり、ラジオ体操をし、乾布摩擦（かんぷまさつ）をします。今だと女の子は6年生にもなれば大人の身体に近いので、はだか体操はあり得ませんが、当時は男の子と同じ体型でした。これを3年以上続けたせいか、めきめき丈夫になり高校卒業まで、皆勤賞の連続でした。

長く生きるということは、サーフィンで高い波を運よく乗り越えてきたようなもので、まだこれからどうなるかわかりません。最近是有名、無名を問わず、私と同じくらいの年齢の人が次々に先立っていくので、なんともいえず寂しくなります。

それ以外で心配なことは、私たちの世代はこれまで「まじめに働けば、普通の生活が出来て衣食住に困らない」という社会構造の中にいることができたが、これからは高齢者の社会保障費が高騰して若い世代の生活を圧迫していくことです。

少子高齢化世界一の日本で、合計特殊出生率（1人の女性が生涯で産む子供の数）が1.57にまで下がって、「1.57ショック」と騒がれたのは1990年のことでした。それ以後、政府の少子化対策は中途半端で実効が上がらず、今では産婦の急病を救う救急病院すらままならないという実態や、子供を虐待して死に迫りやる親が増えるなど、末期的状況にあります。若い世代の物心両面での生活の貧困は、結婚すら難しくしています。昨年の出生率は1.34でした。

さらなる少子化、さらなる高齢化…。世界第2位の経済大国の面目が丸つぶれの日本を正常にもどすために、私たちは今後どんな活動をやっていけばいいのでしょうか。今のような状態は、私たちの憲法にも違反するものです。

憲法第25条

すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。

国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障および公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない

私の世代は、法の下での男女平等、女性差別撤廃を迫ってきましたが、アメリカ型のグローバル経済体制の中で多くの男性が貧困に沈み、さらにその下に多くの女性が置かれるようになった今、25条と同じ主旨を実行している福祉先進国にまなび、人生が楽しめる国にしていきたいと思います。

つむら あきこ（いこ☆る代表）

2008. 冬号 vol.18